

向山 直佑 (Mukoyama Naosuke)

2019～2021 年度奨学生

オックスフォード大学 政治国際関係学部 博士課程

オックスフォード大学政治国際関係学部での博士課程生活も、3 年目に入った。3 年目は、春休みのフィールドワークを除いて、通年オックスフォードにいる予定だったが、それもコロナウィルスの流行によって完全に変わってしまった。コロナ前とコロナ後の世界はまったく質的に別なものであるため、この 2 つの世界をまたがる形で報告することには奇異な印象を拭うことができないが、時間はウイルスに合わせて進んでいるわけではないのだから、それもまた仕方のないことなのだろう。

前回の報告からの半年間での新たな出来事といえば、まずティーチングが挙げられる。1 年目はまずコースワークを受け、博士論文計画の審査を通過することが目標で、まず慣れるに精一杯であり、2 年目はフィールドワーク等でオックスフォードにあまりいなかつたため、3 年目の今年、ティーチングを開始することになった。博士課程の院生が行うティーチングといえば、よくあるのがティーチング・アシスタントとして、教員が教える授業の補助をすることである。その内容は、学生への連絡やオフィスアワーにおける質問への回答、さらには TA セッションで授業内容を解説することなどが、アメリカなどの PhD プログラムでは標準的になっている。これに対して、オックスフォードにおける博士院生のティーチングとは、ほとんどの場合、学部生のチュートリアルを担当することを意味する。チュートリアル (tutorial) とは、一対一あるいは一対二で週 1 回 1 時間、カレッジで行われる、個別指導のことである。そこではチューター (tutor) が、学生の書いた 2000 語ほどのエッセイを添削し、学生に質問を投げかけて議論する。これとは別に、学部の授業担当教員が行う授業 (lecture) があり、そこでは主に一方向で解説が行われるのに対し、チュートリアルでは双方向の学習が行われるのが特徴である。ちなみに、チュートリアルはケンブリッジではスーパービジョンと呼ばれているそうだ。

私は 2 学期間、国際関係論と中東政治をそれぞれ各学期 1 人ずつ、合計 4 人に教えた。うち 3 人はアメリカからの交換留学生で、Stanford、Georgetown、Sarah Lawrence College の各大学の学生で、残りの 1 人はオックスフォードの正規学生である。いずれも良い経験であったが、一学期目に中東政治を教えたスタンフォードの学生は、驚くほどできの良いエッセイを毎週提出し、チュートリアルでの議論でも、こちらも知的な刺激を受けることが非常に多かった。感心した私は博士課程への進学を強く勧めておいたが、どうなるだろうか。ティーチングが終わった後も定期的に連絡をくれるので、今後の活躍が早くも楽しみである。

一方で、教えるのに苦労する学生もいた。例えばある学生は、国際関係論を今まで勉強したことがないからというのもあるものの、あまりエッセイを書きなれていないことが明らかで、文法ミスや意味の通じない文なども多く、さらには前週に指摘したミスを翌週にも繰

り返す、といった具合だった。この学生は非常に素直で、逆に返事は素直があまり聞いていないのではないかと思われたのだが、別の学生は、指摘を行っても最初 okay と言うだけで、時にあまり納得していない様子を見せる事もあり、言い方は悪いが、ナメられているのかと思ったこと也有った。しかし前者の場合は、くどいくらいに毎週指摘を繰り返すことで、後者は、まず雑談を通じて個人的な信頼関係を築くことで、徐々に問題なく対処できるようになってきた。もちろん、もっとできたことはあったと思うが、こちらも新米教師なので、学びの過程と容赦してもらいたいと思っている。総じてティーチングは面白いのだが、同時に、準備に時間がかかる割には自分の業績としてはなかなか評価されづらいこともあります、行うのは今年度だけにし、来年度は博士論文に集中しようと考えている。

もう一つの今学期の大きな出来事といえば、なんといっても博士論文の執筆開始がある。1 年目の終わりに博論計画の審査があった際、論文の第 1 章（導入）と第 2 章（理論部）の草稿を提出していたのだが、まだそれらは最終的な博士論文の本文として使う水準には達していなかった。今年度は 1 学期目に湾岸諸国に関する実証部分のチャプターの執筆を開始し、13000 語ほどの章を書き上げ、2 学期目には、第 1 章を一から書き直し、春休みには第 2 章を書き直した。まだまだ粗い第一稿ではあるが、ついに博士課程の最終成果の本文を書き始めたということで、感慨があった。オックスフォードの博士課程には、①博士論文計画審査（イントロ+1 章）、②中間審査（イントロ+2 章）、③最終審査の 3 つの閑門があり、私は 1 年目の終わりに①をクリアしたが、今年度の終わりまでに②を終えたいと思っている。そこから 1 年以内に③を突破し、博士号を取得することになる。

ただ、コロナによって、色々なことが変わった。研究自体はイギリスにいても日本にいても進めることができ、博士課程を 4 年目までに修了するという当初の計画自体は、実現できると思う。しかし、問題は「出口」である。コロナによる不景気のため、各国で相次いで大学が新規採用を凍結している。そのため、今年のジョブマーケットには相当な困難が予想される。博士号を取得しても、研究職が得られるかどうかが分からぬのである。2021 年秋からのポジションへの応募は、2020 年秋から始まるので、実際マーケットがどうなっているかは、その時期にならなければわからぬが、場合によっては、卒業を 1 年遅らせなければいけない可能性も否定できない。自分の研究者としての競争力には一定の自信はあるが、全体のパイが激減てしまえばどうしようもない。私だけの不幸ではないが、見通しは不安である。

いずれにしても、今どうにかできる話ではないので、今はプラン B を考えつつ、肅々と研究を進めるしかない。一日も早いパンデミックの終息を祈るばかりである。

写真 1：家の近くの Port meadow という牧場／公園を散歩



写真 2：毎日自炊をするようになった。写真はエビマヨ



以上